

ラオス帰国研修員フォローアップ調査＜その3＞

— 人材育成と広がる波及効果 —

最終回となる第3回では、日本での研修を通じて育成された帰国研修員が、現地でどのような役割を担い、その成果が組織や地域にどのように広がっているのかについて紹介する。

今回のフォローアップ調査を通じて特に印象的であったのは、帰国研修員がそれぞれの所属機関において、技術者としてだけでなく、指導者や調整役としての役割を担い始めている点であった。農家への技術指導に加え、同僚や上司と協力しながら活動を進める姿からは、研修を通じて培われた主体性や責任感の高まりが感じられた。

実際に多くの帰国研修員からは、「日本での研修を通じて、自信を持って人前で説明できるようになった」「農家から質問を受けても、根拠を持って説明できるようになった」といった声が聞かれた。特にプレゼンテーションや実験結果の発表、グループワークなどの経験は、帰国後の業務に大きく役立っているようであった。技術そのものに加え、「どのように考え、どのように伝えるか」を学んだことが、農家や同僚との関係構築につながっていることがうかがえた。

Clean
Agriculture
Standard Center
(CASC) では、

複数の帰国研修員が農家への技術指導や実証試験に取り組むとともに、農家グループの活動も支援していた。小規模農家が多いラオスでは、農家同士の協力も重要である。帰国研修員は、農家グループを通じた技術や経験の共有を支援しており、こうした取り組みが個々の農家から地域への技術普及につながりつつある。

教育機関である Champasak Agriculture and Forestry College (CAFC) では、帰国研修員が教

育者としての役割を広げていた。授業や実習の中で日本で学んだ技術や考え方を学生に伝えるだけでなく、教材作成やカリキュラム改善にも

関与していた。「研修で学んだ内容を次の世代に伝えることが自分の役割だと考えている」と語っており、研修成果が学生教育という形でも波及していることが確認された。

また、今回の調査では、帰国研修員のキャリア面での変化も見られた。帰国後に昇進した帰国研修員や修士課程へ進学した帰国研修員もあり、日本での研修で得た知識や経験が、その後のキャリア形成にも良い影響を与えていることがうかがえた。

さらに、プロジェクト・サイクル・マネジメント (PCM) で学んだ問題分析や目的分析の手法が、帰国後の業務にも活かされていた。複数の帰国研修員から、課題を整理しながら計画を立案し、関係者を巻き込んで活動を進める際に役立っているとの声が聞かれた。

今回のフォローアップ調査を通じて、日本での研修は技術の習得だけでなく、人材育成や組織強化、さらには地域への波及効果をもたらしていることが改めて確認された。帰国研修員たちは、それぞれの現場で経験を積みながら、技術の担い手であると同時に、人材育成や地域への技術普及を担う存在としても成長を続けている。

本シリーズでは3回にわたり、ラオスにおける帰国研修員の活動を紹介してきた。今回の調査で確認された成果や課題を今後の研修に反映させることで、日本での学びがさらに現地に根付き、持続的な農業発展につながることを期待したい。



帰国研修員による実験圃場の様子



筆者（中央）と帰国研修員